

機関番号：14401

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007年～2010年

課題番号：19520457

研究課題名（和文）日本語教員と理系教員との協働による日本語論文作成支援リソースの開発と評価

研究課題名（英文）Japanese academic writing resources prepared jointly by Japanese language and science teaching professionals.

研究代表者：村岡 貴子

（MURAOKA TAKAKO）

大阪大学 国際教育交流センター 教授

研究者番号：30243744

## 研究成果の概要（和文）：

専門的文章作成を支援する方法の開発を目標に、日本語テキスト分析タスク等を行う15週間のライティング授業の受講留学生の文章評価と学習活動についての内省を分析し、対象者の在学段階、母語、職歴、研究歴等、複数の背景要因を考慮しつつ、スキーマ形成との関連を考察した。スキーマ形成支援のために、テキスト分析タスクに加え、獲得が困難な学習者には獲得成功者のコメントをリソースとして提供することが一つの可能性であると考えられた。

## 研究成果の概要（英文）：

In this research, we analyzed the results in text-evaluation and reflective comments by international students in 15-week writing course that offered text-analyzing tasks as one of its major activities, considering the learners' academic standings, learning experiences and various cultural/environmental backgrounds to identify possible influential factors on schema formation and develop comprehensive resources to assist it. While text-analyzing tasks were useful both for the more and the less successful learners, the latter were expected to be benefited from exposure to reflections by the former, which will be usefully incorporated into resources for the teaching of academic writing.

## 交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	900,000	270,000	1,170,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	0	0	0
総計	2,200,000	660,000	2,860,000

研究分野：日本語教育学

科研費の分科・細目：言語学、教育学

キーワード：専門日本語教育、アカデミック・ライティング、論文作成支援リソース、テキスト分析タスク、論文スキーマの形成

## 1. 研究開始当初の背景

筆者らはこれまで、学位取得を旨として日本の大学院で学ぶ予定の研究留学生を対象とした論文等の文章作成の支援方法の開発研究

を行ってきた。

上記のような研究留学生の作成した文章の分析を通して、彼らの抱える問題点には、言語知識不足から起こる問題と研究の成果とし

での学術論文に関するスキーマの欠如に起因する文章構成や論理展開の問題とがあること、および、後者は言語知識の増加によって克服されるとは限らず、特別の手当てが必要であることが示唆された。

後者の問題は、文末のモダリティー表現の不適切性、文や段落間の論理的関係性の表示の欠落、学術的論述に必須の厳密さの不足、文章全体の一貫性の欠如等の形で現れるが、これらは言語の形式や用法に関する説明や形式練習によっては改善されにくい。こうした問題に対応するには、従来型のリソースに加え、論述のムーブ分析・適切性判断・訂正等の「テキスト分析タスク」が必要であると考えられた。

留学生のアカデミック・ライティングの支援のためには、目標となる言語の質を把握するだけでなく、当該留学生の持つライティング上の問題点についても明らかにしておく必要がある。アカデミック・ライティングにおいて文章構造と論理展開等の問題は、最も重要度の高いものである。

これにかかわる学習者の問題点については、授業や個別指導を通して、日本語の教員が経験的に蓄積している知見はあると推測されるが、体系的な指導を目指した有用な研究はまだ行われていない。関連する一部の研究として、村岡（2007）は、中級程度の日本語能力を有する日本語学習者の作文例から、段落内のトピックの分散や、複数段落における同趣旨の重複等、論理展開上の問題を予備調査的に分析を行った。

## 2. 研究の目的

本研究は、日本の大学院で学ぶ留学生を対象とした論文作成支援を目的とした。特に、筆者らの所属大学に在籍している日本語予備教育段階の大学院レベルの理系の学習者を主な対象とした。彼らは一部の大学院生を含む研究留学生である。

## 3. 研究の方法

協力者である留学生のライティングに関

する調査を行い、論文や研究に関するスキーマが形成されている学習者とそうでない学習者について、彼らが作成した文章、文章評価の調査、アンケート調査、および個別インタビューから質的な分析を中心に行った。

また、学習者の文章をもとに編集した学習課題の「テキスト分析タスク」も、文章のトピックごとに、ワードとエクセルの両方の形式でデータベース化して保存している。

さらに、ライティングの学習課題について再考し、一定のコンセプトを持ち、継続性のある協働的なタスクの意義を検討した。

## 4. 研究成果

### (1) 学習者作文コーパスと「日本語テキスト分析タスク」

学習者の作文を新たに収集し、エクセルソフトを活用しつつ150編余りのファイルのコーパス化を進めた。これにより、学習者の母語背景（漢字圏か非漢字圏か）や、在学段階（博士課程への進学予定者か修士課程への進学予定者か）、および研究環境などの、多様な背景の学習者の作成した文章をデータベース化したことになる。

学習者の作文をもとに編集した学習課題である「テキスト分析タスク」も、電子化されたデータとして保存している。「高齢化社会」や「インターネット」などの7つのトピックによる課題を扱ったもので、5学期分のデータが保存されている。このタスクは、提出された未添削の作文の一部から、教員が200～300字程度の段落ごとか全文を抽出して編集した模範例や問題例を用いて、学習者全員が適切性を検討し合う学習活動である。この活動の目的は、他者の文章やそこに示された観点から学ぶという学習ストラテジーと、批判的に読む視点の獲得である。主なねらいは、学習者が文法や表記の誤用にとらわれずに、内容と論理展開および関連の表現に注目して、他者の文章を批判的に分析できるようになることである。

### (2) スキーマ形成に関する意識調査

学期中の文章課題をもとにした作文データに加え、学習者が学期当初に作成した作文を、学期末に自身で添削するといった作業を通じて、学習者自身がライティング能力の向上を認識したコメントや感想をインタビューとアンケートの調査により収集している。

また、授業実践時の学習者の発言内容を記録したデータ分析から、ライティングのスキーマを有する成功者とそうでない不成功者の特徴について記述を行った。成功者は文章の文法や漢字といった文章を構成する部分のみにとらわれることなく、文章全体の構成や段落のトピックセンテンスの存在を重視しており、かつ、文章のスタイルなどから、自身の研究分野で用いられる報告書の文章を想起するといった、広い視野でライティング学習に臨んでいた。

さらに、授業実践で活用した学習課題であるタスクの位置づけと意義を考察した。

### (3) スキーマ形成に関する考察

中心的な成果としては、成功者の発言や考え方を一定程度明らかにした。彼らは、厳密な文章評価の能力を有しているだけでなく、外国語学習に対して一定の信念を有しており、それらが彼らの個々の学習活動に少なからぬ影響を及ぼしていることも示唆された。つまり、先述したように、表現や文法といった「部分」に捉われず、段落構成、トピックセンテンスの所在、および文章中の論理の一貫性にも及ぶコメントが見られた。成功者は、また、言語学習そのものを、研究活動や過去の種々の学習経験と関連付けて捉えたコメントを行っていた。このように、「部分」ではなく、「全体」や「構造」を意識的に捉え、自己の学習を客観的に見る視点は、成功者と不成功者との著しい差異であった。

一方の不成功者は、文法や表現の難易度にとらわれ、適切な文章評価が行えず、また、それらに対しては、母国での学習経験や教育文化、研究活動の経験等の影響があると示唆された。彼らの多くは、概して、もともと教師主導型の教育に慣れており、批判的に他者の

文章を読むことや、そういった批判的な視点で自身の文章を推敲することにおいては、豊富な経験がなかったことから、今回のタスクを通じた授業実践で徐々にスキーマ形成が行われ、その途上にあると考えられた。

以上の成功者のコメントもデータベース化して不成功者への刺激に活用し得る可能性についても示唆を得た。つまり、同じ授業を受講している現在のクラスメートだけでなく、時空間を超えて、ある文章に対する過去の他者が批判したコメントを分類してリソース化することが可能であると考えられた。

今後、さらにデータを増やし、学習者の多様な背景とライティング能力の育成について考察を深め、リソース開発の指針を得体と考えている。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計7件)

- ① 村岡貴子 (2010) 「専門日本語ライティング能力養成のための学習課題の捉え方」『大阪大学留学生センター研究論集 多文化社会と留学生交流』第14号, pp.49-56, 査読無
- ② 村岡貴子・因京子・仁科喜久子 (2009) 「専門文章作成支援方法の開発に向けて: スキーマ形成を中心に」『専門日本語教育研究』第11号, pp.23-30, 査読有
- ③ 村岡貴子 (2008) 「専門日本語教育における語彙指導の課題 - アカデミック・ライティングの例を中心に - 」『日本語学』第27巻第10号9月号, 明治書院, pp.60-69, 招待
- ④ 村岡貴子 (2008) 「専門日本語ライティング教育の再考」『銘傳日本語教育』第11期, 銘傳大學応用語文學院應用日語學系出版, pp.1-18, 招待
- ⑤ 因京子・村岡貴子・米田由喜代・仁科喜久子 (2008) 「日本語テキスト分析タス

クの論文構造スキーマ形成誘導効果』『専門日本語教育研究』第10号, pp.29-34, 査読有

- ⑥ 村岡貴子 (2008) 「日本における大学院レベルの日本語学習者を対象としたアカデミック・ライティング教育とは」『アカデミック・ライティング研究Ⅱ - より効果的な教育のために -』言語文化共同研究プロジェクト 2007, 大阪大学大学院言語文化研究科, pp.15-23, 査読無
- ⑦ 村岡貴子 (2007) 「日本語教育におけるアカデミック・ライティングの論理展開に関する問題とその指導」、村岡貴子、『アカデミック・ライティング研究-日本語と英語の場合- 言語文化共同研究プロジェクト 2006』pp. 27-34, 大阪大学大学院言語文化研究科, 査読無

[学会発表] (計4件)

- ① 村岡貴子・因京子・仁科喜久子・米田由喜代 (2008) 「研究留学生のための日本語ライティング授業でのテキスト分析タスク - 多様な学習背景の学習者への意識化を目指して -」『専門日本語教育学会第11回研究討論会』査読有, 2008年3月8日, 於大阪大学
- ② 村岡貴子・因京子・米田由喜代・仁科喜久子 (2008) 「理系大学院レベル留学生のライティングに関する問題の調査・分析 - 日本語論文作成支援リソース開発のために -」日本語教育学会秋季大会、査読有, 2008年10月12日, 於山形大学
- ③ 村岡貴子 (2008) 「専門日本語教育とその研究に必要な視点 - 日本における専門日本語教育研究の概観から -」銘傳大學 2008 国際學術研討會「應用日語學系專業日語教育學術研討會」招待講演, 2008年3月14日, 於台北, 台湾

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

村岡 貴子 (MURAOKA TAKAKO)  
大阪大学・国際教育交流センター・教授

研究者番号: 30243744

### (3) 連携代表者

仁科 喜久子 (NISHINA KIKUKO)  
東京工業大学・留学生センター・教授  
研究者番号: 40198479

因 京子 (CHINAMI KYOKO)  
日本赤十字九州国際看護大学・看護学部・教授  
研究者番号: 60217239

菊地 和徳 (KIKUCHI KAZUNORI)  
大阪大学・理学研究科・講師  
研究者番号: 40252572

熊谷 悦生 (KUMAGAI ETSUO)  
大阪大学・基礎工学研究科・講師  
研究者番号: 20273617

惣田 訓 (SOUDA SATOSHI)  
大阪大学・工学研究科・准教授  
研究者番号: 30322176